

### 1 学校教育目標

○考える子    ○がんばる子    ○助け合う子    ○元気な子

### 2 めざす学校像、児童像、教師像

○学校像	○児童・保護者・地域から信頼される学校 ○子供の「心・頭・身体」を育てることを最優先に考える学校 ○教職員だけでなく、各種専門家と共に子供を育てようとする学校
○児童像	○子供たちがめざして欲しい「扇っ子」の姿を全校に明示する ・「お」・・・「おもいやり」の心を大切にする児童 ・「う」・・・「うんどう」により、体を鍛える児童 ・「ぎ」・・・「ぎもん」を大切にし、自ら学ぶ児童
○教師像	○自らの向上を図ることができる教師 ○学校運営に貢献し、主体的な提案ができる教師 ○学校、児童、地域に誇りをもてる教師

### 3 学校の現状及び前年度の成果と課題

[平成31年度の現状]

- 児童
  - ・基礎学力定着のための全校的な取組を継続させ、学力調査の通過率を向上させる必要がある。
  - ・学習意欲・学習規律・生活指導等、特別支援教室での指導が必要な児童が複数名いる。
- 教職員
  - ・学校経営計画に添って判断して行動できるミドルリーダーが育ってきている。
  - ・経験年数が少ない教員が多く、課題解決型の授業力を高める必要がある。
  - ・教職員が15名転入した。学習指導・校務分掌等の各リーダーを中心に、組織が機能するように管理職が把握し、必要に応じて指導や組織の改編を行う。
- 保護者
  - ・学校の教育活動に対して協力的な保護者が多い。
  - ・基本的生活習慣の確立や家庭学習の習慣化等において学校の関与が必要な家庭がある。

[前年度の成果と課題]

- 児童
  - ・学力向上策・補充学習等により基礎学力が定着した。その力を維持させることが課題である。
  - ・大勢の前で堂々と発言できる自信や自己表現力を育てることが課題である。
  - ・分かる授業と補充学習等により基礎学力定着を図ることが課題である。
- 教職員
  - ・小中連携研究授業・巡回指導（教科指導専門員）等により、授業力が向上してきた。
  - ・若手教員が多く経験が乏しいため授業力向上が課題である。ICT機器を活用させたい。
  - ・指導力向上に向けた指導・助言と、メンタルケア・働き方改革を両立させる必要がある。
- 保護者・地域について
  - ・地域・保護者は、挨拶運動・地域行事に協力し、地域ぐるみで子供を育てようとしている。
  - ・PTA活動では、スポーツや学年活動が活発で、教員と保護者の連携が取れている。
  - ・学校と家庭や地域での子供の様子の違いについてSC等を活用して共通理解する必要がある。

### 4 重点的な取組事項

番号	内容	実施期間				
		29	30	31	32	33
1	学力向上	○	○	○	○	○
2	自己肯定感の醸成	○	○	○	○	○
3	教員の授業力向上	○	○	○	○	○
4	小中連携	○	○	○	○	○

## 5 平成31年度の重点目標

<b>重点的な取組事項－1</b>		学力向上
<b>A 今年度の成果目標</b>		平成31年度区学力調査目標通過率と年度末の到達目標
児童の基礎的学力の定着を図る		<ul style="list-style-type: none"> <li>・H31区調査通過率75%以上</li> <li>・年度末に1学年上問題で80%以上</li> </ul>
<b>B 前年度の取組み内容</b>		
<b>項目</b>	<b>具体的な方策</b>	
足立区学習定着度調査の複数回実施	4月にH30年度問題で調査、9月に再調査、12月にH30年度の1学年上の問題で調査、2月に再調査。補充学習計画を毎月作成・実施。	
読書活動の推進	図書ボランティアの活用・図書委員会への指導を強化。「読書記録カード」で児童の読書記録を管理。目標達成者を全校朝会で賞揚。	
そだち指導員と学習支援員、特別支援教室が連携した個別指導の充実	そだち指導員・学習支援員・特別支援教室担当教員が連携して、学習指導方を工夫して指導効果を高める。そだち教室児童は全員卒業できる学力を身に付けさせる。	
<b>C 前年度の成果と課題</b>		
<p>&lt;成果&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・29年4月調査においては前年度通過率を20%向上させることができたが、30年4月調査では全体で70%に届かなかった。補充学習・サマースクール等により、9月再調査では10%回復させることができた。</li> <li>・教科指導専門員による巡回指導になり、国語・算数の足立スタンダード型授業について繰り返し指導を受けて若手教員の授業力が向上してきている。</li> <li>・5分休みや放課後等、わずかな時間でも担任が臨機応変に補充学習を行い記録することが定着してきた。</li> <li>・そだち学習における教材や指導法を担任等が活用することにより補充学習の効果を高めることができた。</li> <li>・特別支援教室（通称名：わかくさ）が開設し、20名が利用している。巡回指導教員が教室に入り込んでの指導や専用教室での指導を行うことにより、支援が必要な児童が活動に集中できるようになってきた。</li> <li>・学力向上校内委員会の活動が活発化し、取組みの提案や実施状況の調査などを積極的に行った。現状把握と対策の立案の中心的な役割を果たせるようになった。</li> </ul> <p>&lt;課題&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「授業チェックリスト」「若手教員育成シート」を活用して、各教員の指導力向上に努め、管理職が適宜指導する。</li> <li>・学級担任は自分の学年は自分が責任をもって学力を付けるという心構えをもち、毎週の指導計画を必ず事前に提出し、管理職が点検・指導する。新しい補習体制の構築と実施が今後の課題である。</li> <li>・学校全体の傾向は依然として、漢字や言語事項・文章記述、繰り上がりや繰り下がりのある計算・文章題の題意を正しく読み取り立式することなどである。また、学んだことを維持させる手立てである。</li> <li>・29年度末において、「そだち指導」の考え方を生かし、学区力テストの正答率50～70%の児童を抽出して補充学習を充実させた。補充学習を行った児童は学力が向上・学習内容が定着したが、ぎりぎり抽出されなかった児童（正答率80%程度）の中に、4月調査の結果がふるわなかった児童が見られた。抽出児童の正答率の範囲を広げる必要がある。</li> <li>・今年度導入されるICT機器やタブレットPCを活用することにより、児童の学習意欲の向上・その結果としての学力向上につなげる。</li> </ul>		
<b>D 今年度の目標実現に向けた取組み</b>		
<b>項目</b>	<b>達成基準</b>	<b>具体的な方策</b>
別紙 「平成31年度 学力向上アクションプラン」参照		

<b>重点的な取組事項－2</b>		児童の自己肯定感の醸成
<b>A 今年度の成果目標</b>		<b>達成基準</b>
児童の自尊感情を高め、母校愛や郷土愛を育む。		児童による「生活がんばりカード」や、ふれあい月間調査で良い項目を70%以上にする。
<b>B 目標実現に向けた取組み</b>		
<b>項目</b>	<b>達成基準</b>	<b>具体的な方策</b>
全校朝会等の場での児童、教職員、保護者の活躍を賞揚	機会があるごとに全校朝会等で表彰、賞賛、善行紹介を行う。	児童のよさを具体的に認め・周知し、学校全体にそのよさが広がるようにする。また、他の人のために努力している児童を模範的な児童として積極的に紹介する。保護者、教職員も表彰、称揚する。
自己実現・発表の場を設ける。	学級・学年を単位として、全校児童の前で堂々と表現できる。	各学級1回以上、音楽や音読発表など、全校児童の前で表現する機会を年間計画に位置づける。発表日に向けて、学年の学習内容と関連させながら発達段階に応じた表現力の育成に励み、児童一人一人の自己有用感を高めることにつなげる。
外部講師による体験活動を実施。	全学年で1回以上の体験活動を行う。 オリンピック・パラリンピック教育としても外部講師を招聘した体験活動を計画的に実施し、充実させる。	外部専門家講師による授業を継続して行う。(落語・手話・点字・スポーツ選手等) 東京都や地域の諸団体の出前授業に応募して講師を確保する。地域の優れた人材を見つけ、講師として体験活動を指導してもらう。
扇小学校創立五十周年記念事業を通じて、母校愛や地域への郷土愛を醸成する。	母校や地域に誇りを持ち、記念事業にふさわしい態度で参加することができる。	扇小学校の歴史を振り返る活動や記念集会等を開催。学校設立協力者や地域の方、各方面で活躍している卒業生などを招待して交流会を開催。

<b>重点的な取組事項－3</b>		教員の授業力向上
<b>A 今年度の成果目標</b>		<b>達成基準</b>
課題解決型指導方法の確立（国語・算数を中心に）		各教科について、「足立スタンダード」またはそれに準ずる課題解決型指導方法を全教員が共通実践する。板書や児童のノート指導等の全校統一を徹底する。
<b>B 目標実現に向けた取組み</b>		
<b>項目</b>	<b>達成基準</b>	<b>具体的な方策</b>
課題解決型の授業を行う。また、授業公開と授業参観により自らの指導法改善・工夫に取り組む。	授業公開・参観をそれぞれ、年間3回以上行う。達成状況の判断は管理職が行う。	年間3回以上の授業観察を基に管理職と教科指導専門員・他の教員が授業観察を行い、「授業チェックリスト」「若手教員育成シート」に基づいて改善させる。
校内研究会・研修会の実施	小中連携授業研究とは別に授業研究会・指導法の研修会を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新指導要領の移行期間や完全実施に関する研修。</li> <li>・足立スタンダードを理解する研修。</li> <li>・新規導入されるICT機器やタブレットPCの活用方法の研修。</li> <li>・全教員による協議会を行う授業研究会の実施。</li> </ul>
教育研究会への参加	区小研への参加80%、各年次研への参加100%、区内外の教育研究会等へ2回以上参加。	区小研、各年次研参加は原則悉皆。区内外の研究会等への参加を奨励し、教科主任には指導教諭公開授業に参加させる。研修後は校内に伝達講習をさせる。

<b>重点的な取組事項－４</b>		小中連携（扇小-江北桜中、高野小、江北小）
<b>A 今年度の成果目標</b>		<b>達成基準</b>
基礎学力の定着をめざした指導法の研修や、生活指導上の課題解決に取り組み、中一ギャップ解消に向けて9年間の学習・生活指導の流れをつくる。また、各校種毎に教員の授業力向上を図る。		種々の交流の機会を作り、年間20回以上を目標とする。
<b>B 目標実現に向けた取組み</b>		
<b>項目</b>	<b>達成基準</b>	<b>具体的な方策</b>
小中教員相互の連携	授業力向上のための研修会・授業研究・及び共通課題の解決に向けた研修を年7回以上行う。 また、保健部会を中心にして、生活指導や特別支援に関する情報交換を密にする。	○合同研修会（全体会・分科会・授業研究・共通課題・連絡会）などを行う。 児童生徒の実態を知り、指導方法の違いや、教科の系統性や連続性を確認し、それぞれの発達課題を理解した上で、足立スタンダード型の授業ができるようにする。 ○研究授業公開を小中4校が各1回ずつ実施し、各教科領域の相違性や連続性の理解を深め、円滑な接続を目指す。 ○児童生徒の学力の情報を交換し、個別指導に生かす。 ○入学予定児童の状況を伝え、中学校での個別指導の資料とする。生活指導面での円滑な接続を目指す。
児童・生徒の連携	児童生徒の交流を年3回以上行う。	○サマースクール補助に生徒の参加を要請する。 ○小学生が中学校運動会の参観や競技参加できる機会を設定する。 ○小学生が合唱コンクール等、中学校の文化的行事に参観・参加する。 ○生徒会役員が小学校に来校し、学校紹介・説明会を行う場を設ける。 ○部活動体験会に6年生が参加し、体験する機会を設ける。
生活指導の連携	○交通安全・生活安全について小中で共通した指導を行う。 ○課題のある児童生徒を共通理解し、指導に生かす。	○生活指導部を中心に、発達段階に応じた内容・方法で、統一した指導を行う。 ○定期的に生活指導上の情報交換・合同研修会を行う。
地域やP T Aの連携への協力	地域行事、P T A主催行事に児童延べ100人派遣する。また、小中連携講演会等に延べ10人以上の教員を参加させる。	○扇小創立五十周年記念事業を行うため、近隣校や地域の協力を得て本校主催行事への参加者を増やす。 ○小中学校P T A主催行事、地域行事に教員、児童を計画的・積極的に参加させ、地域・P T A・教員・小中学生との交流を深め、地域の見守りのもと、小学校から中学校へ円滑に進学できる環境をつくる。